# Case Study 6

● 機能訓練指導員 ●

あん摩マッサージ指圧師

# 利用者の体も心も少しでも楽にし

## パソコンを使って、利用者の施術の記録を残し、技術の向上につなげています。

**■プロフィール**

相蘇 健太郎 さん（27歳）
（障害等級１級）

あいそ・けんたろう　1978年、山形県出身。生後3歳頃に視力を失い、さらに聴覚にも障害を負う。県立山形盲学校であん摩マッサージ指圧師の資格を取得。一時開業することも考えたが、2003年6月～04年3月の9カ月の職場適応訓練を経て、正式に機能訓練指導員として採用される。趣味は読書。

### 利用者の感謝の言葉からエネルギーをもらう

「盲学校では健康な人同士で実習訓練をしていたので、当施設にきた当初は病気の後遺症や障害を持ったお年寄りと接することになって、力の加減など戸惑うことばかりでしたし、施設の広さにも驚きました。施設内はバリアフリーになっていますが、とても広いので、施設の中を全て一人で巡ることはまだできませんね」と話すのは相蘇健太郎さん（27歳）です。生後まもなく視力を失い、さらに聴覚に障害を負った中で、山形県立盲学校であん摩マッサージ指圧師の資格を取得しました。相蘇さんは通所リハビリテーション利用者や入所者（100名）を中心に機能訓練を担当しています。利用者自身の力で施術台に移動できないケースなどは、周囲のスタッフと連携して安全を確保しています。ざわついた中では近くの人の声も聞こえなくなり、施術の順番を間違えるケースなどもありますが、相蘇さん自身が助けが必要と感じたときには、遠慮しないで周囲に助けを求めることを心掛けているといいます。

「利用者の方に『楽になったよ、ありがとう』『気持ちいいよ』って言っていただくと、逆にエネルギーをもらえる感じがします」

### 9カ月の職場適応訓練を経て正式採用

ハローワークを通じて当施設内での9カ月間にわたる職場適応訓練を経た後に、正式に機能訓練指導員として採用されました。「機能訓練を2度、3度と行ううちに利用者それぞれに適した力加減がわかるようになります」と、仕事に慣れた現在ですが、相蘇さん

医療法人 宏友会
## 介護老人保健施設　うらら
所在地：山形県酒田市大字本楯字前田127-2

# てあげたい

**同僚からのメッセージ**
理学療法士
佐藤 真紀さん

相蘇さんのマッサージを楽しみにして、来所されるデイケアの利用者は多いですね。

は職場適応訓練の９カ月の間に職業人としても大きな変化を遂げたのです。まず挨拶を含むビジネスマナーを習得しました。機能訓練を行う一方で、週１回のペースで同じ法人内にある診療所の先輩マッサージ師の下で、介護老人保健施設に即した技術の習得に励みました。そして、利用者に語りかけながら心を通わせて施術することの大切さを学んだのです。「コミュニケーションをとることはあまり得意ではないのですが、できるだけ話し掛けながら施術し、利用者の体も心も楽にしてあげたいですね」という相蘇さんは、「どうにかお年寄りの役に立ちたい」という自らの気持ちを具体的に表現する技術を手に入れつつあるようです。

## 高まりつつある、職業意識

「どんな職場でも同じですが、日常生活に介護を必要とする高齢者を対象とする当施設のような職場では、とくに挨拶や声掛けは重要なコミュニケーション手段になります。相蘇さんにとっては初めての職場ということもあり、最初は思い通りにできず、悩んだことも多かったことと思いますが、まじめな性格なので少しずつ着実に成長しています」と、事務長を務める佐藤裕邦さんは話しています。最近では来所した利用者の中には「まず、相蘇さんのマッサージ」と指名する方もいて、確実に相蘇さんのファンが増えています。また社内メールを使用して積極的に自ら情報を発信するようになり、職員同士の交流も増えつつあります。パソコンを使って利用者一人ひとりの施術の記録を残して情報を整理・把握し、自らの技術の向上につなげるなど、職業意識が高まっています。

## Message

**●事務長**
**佐藤 裕邦(さとう ひろくに)さん**

相蘇さんが当施設にきた当初は、お年寄りのお役に立ちたいという想いが強い一方で、その想いを表現する術に欠けていたように思います。しかし、徐々に職場の雰囲気にも慣れ、介護老人保健施設の特殊性やコミュニケーションの重要性を理解してからは、成長の歩みを早めていると感じています。スタッフ間の連携も問題なく、それぞれの専門の職域で補ってリハビリテーションにあたり、利用者の高い評価を得ています。また、他のスタッフも視覚と聴覚に障害のある相蘇さんと一緒に働くことを通して、障害に対しての理解が一層深まっています。その結果、介護サービスの質の向上に繋がると実感しています。